

# インディアン

中野香織  
KOHJI KANOYAMA

彼らに深い共感を覚えれば覚えるほど、どう呼ばいいのかわからず、戸惑ってしまう。

「ネイティブアメリカン」という呼び名が、現在、一般的になつてはいる。だが、この呼称は白人側が彼らを管理するという視点が入った政治的用語だから不快だとして、

リカン（初期アメリカ人）という呼び名が普及している。呼称をめぐるさまざまな議論があるなかで、彼らをどう呼ぶか、あれこれ悩んだ末、ここでは大雑把に彼らの側に身をおいて「インディアン」と呼ぶことにする。彼らの死生観を詩的に伝える名著『今日は死ぬのにもってこいの日』の著者、ナンシー・ウッドも彼らを「インディアン」と呼んでいる。この呼び名にはいかなる差別も蔑視もない。敬意と親愛をこめて、こう呼ぶのである。

ほとんど絶滅寸前まで虐げられてきた歴史を持つが、インディアンはその信念まで曲げることはなかった。前掲書のナンシー・ウッドは、タオス・プエブロの長老の口から出た言葉として、白人の独善主義・唯物主義を次のように柔らかく批判する。

「世界に対抗して屈服しないわたしたちとは、いったいなんだらう。彼らはずいぶん昔から、わたしたちのところへやって来ては、みんなが同じ顔になるように、わたしたちを丸め込んで白い顔にしようと懸命だった。わたしたちは、このわたしたちを変えようとすべからぬ固定観念、わたしたちの土地を、「利用」と呼ばれる言葉で割り切ろうとする彼らの固定観念が、よく理解できなかった。（中略）お金と所有が人を幸せにするなんてことを、信じるふりをして世を



20世紀初頭。ブラックフット族の酋長とその妻が馬で幼い子供を引き連れている様子。

©Hulton-Deutsch Collection/CORBIS/amanaimages

渡ることなど、どうしてできるだろうか？ 口を開けば白人は、わたしたちにもっと物が必要だと言う。しかし物を持てば、わたしたちはその代償として、自分の魂を売らねばならない」

野蠻なのはいったいどっちだ。このインディアンの信念がいかに正しかったかということは、「白人」側の思想に丸め込まれ、「お金と所有」のために突っ走り、あげく「母なる大地」を人が住めないほどに汚染してしまったことを悔いても悔やみきれない現代の多くの日本人が痛感しているだろう。「世界の進歩なんてものは今やスタートラインのはるか後方へ落後している」という古老の言葉は、予言となつて日本の現状を突く。

実際、大震災の打撃を受け、収束しない原発事故の脅威にさらされている今の私たちにこそ、インディアンの言葉は、深く静かに染み入ってくる。いたるところに「神」を見出す彼らの宗教観、死も生も円環としてとらえる死生観、人間もまた環境の一部とみなす自然観が、古来の日本人の思想と通じあうことを知り、親愛と共感が押し寄せてくる。

とりわけ、冬や死のなかに蘇りの芽を見出し、夏の盛りに死の影を見るインディアンの円環的な死生観には、救いを見出す思いがする。ナンシー・ウッドが伝える次のような詩を読んでいると、生の盛りに驕ることの虚しさをかみしめるとともに、死は必ずしも恐怖ではなく、むしろ命の新生を促す

祝祭であるとも教諭され、おおらかな懐に包まれるような穏やかさで満たされてくる。「もしもおまえが枯れ葉つてなんの役に立つの？ときいたならわたしは答えるだろう、枯れ葉は病んだ土地を肥やすんだとおまえはきく、

冬はなぜ必要なの？するとわたしは答えるだろう、新しい葉を生み出すためさ。（中略）

おまえがまたきく、夏が終わらなきゃならないわけは？とわたしは答える、葉っぱどもがみな死んでいけるようにさ。

人間を含め、万物は死ぬことによつて新しい命となつて甦る。そんな死生観と連動した自然観は、小さな我欲から人間を解放し、スケールの大きな自由を与えてくれる。このような死生観、自然観が、ほかならぬ彼らの装いのなかにも表れている。

動物の羽根や毛皮を用いた服飾品。たとえばゴールドエンイグルの羽根でつくられたフェザーボンネットや、バッファローの角つきヘッドドレスに、カワウソのターバン。鹿革のモカシン。羽根の一枚一枚を戦闘における勲章とする部族もあるが、それぞれの動物のスピリットを「着る」ことで、自らのうちに動物の力を発揮させるという、インディアンの自然観と密着した着衣行為でもある。

服や布に用いる織維も、植物を

生かす。マルベリーの樹皮のシャツや、アカスキのラップスカート。それを細かく裂いてフリンジ装飾にしたり、動物の歯でアクセントをつけたりして美しさを添える工夫が凝らされるあたりに、自然への愛がにじむ。織布の原材料も、イトランや羊毛ばかりではなく、羽根や人間の毛髪まで。毛髪も自然の一部とみなせば、身にまとう服に用いるのもごく自然なふるまいとなる。

自然の一部としての人間であることの自尊と自由を享受し、その感謝と喜びを謙虚かつ大胆に表現するようなインディアンの服飾品は、現代のモード界にとつても、尽きぬインスピレーションの源となっている。

2011年秋冬のモードでは、ロダレテ、プロエンザ・スクーラー、クロエなどの人気ブランドがインディアン風のアイテムや細部を取り入れたランウェイスタイルを発表しているし、ファストファッション各社もインディアンからヒントを得た絵柄のTシャツやビーズのサンダル、フェザーのジュエリーを多彩に提案している。フェザーを使ったヘアエクステまで登場する始末で、こうしたトレンドを「ボカホントラス・プリティ」と呼ぶ

ファッショニスタまでいる。表層の目新しさだけでなく、その表層を支える、環境と一体となったインディアンの生き方に対する共感と憧れもまた、このトレンドの底流に無意識に横たわっていることは、言うまでもない。

「アメリカ・インディアン」と呼ぶべきと主張するラコタ・スー族の活動家がいるし、1977年のジュネーブの国連議場では、「インディアン国際会議」において満場一致で「インディアン」という用語が支持されている。また、学術の分野では、「アーリー・アメ